

平成23 (2011) 年1月1日

第24号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

## 中島三郎助

写真から見る 幕臣・中島三郎助

大河ドラマの影響もあり、幕末ブームに沸く昨今、ここ浦賀にも、激動の時代に生き、大きな足跡を残した武士がいまいた。中島三郎助とは、いかなる人物だったのでしょうか。

中島三郎助は、文政四年（一八二二）浦賀奉行所与力であった中島清司の次男として誕生し、一四才で与力見習いとして、奉行所に出仕します。

一六才の時、アメリカカ船のモリソン号砲撃事件を目の当たりにし、この時以来、父清司の影響もあって、海防問題に強い関心を持つようになります。

ペリー来航の際は、日本人として初めてアメリカの司令官と交渉を果たし、その後、嘉永七年（一八五四）日本で最初の洋式帆船「鳳凰丸」建造に際しては、主任技師として、その腕を振りました。その後は、海軍士官としての修業と造船術を身に付け、江戸の海軍操練所教授方として後進の指導にあたり、浦賀にドックを造り、咸臨丸

の修理を行うなど、海国日本の礎を築く第一人者として活躍しましたが、慶応四年（一八六八）大政奉還により浦賀奉行所が廃止され、解散後、幕臣として徳川側について新政府軍を迎え撃つも、函館五稜郭にて四十九才の生涯を閉じました。

さて、中島三郎助といえば、左の写真を思い浮かべるかたが多いのではないのでしょうか。この写真を撮影したのは、下岡蓮杖（しもおかれんじょう）という幕末の写真家です。日本における初期の職業写真師として、坂本龍馬や高杉晋作などを撮影した上野彦馬（うえのひこま）が西なら、東の下岡蓮杖と称される程、幕末期に名を残した写真家です。



中島義生氏所蔵

下岡蓮杖写 中島三郎助

蓮杖は、浦賀の下田問屋惣右衛門の三男で、浦賀奉行所に十年間足軽として仕えていたことがありました。その後、横浜で在留外国人に写真術を学び、慶応三年（一八六七）横浜大田町に全楽堂という写真館を開業します。

ここに、中島父子を写した写真四枚が残っています。一枚は和服姿の三郎助と側に長男恒太郎が並んでいる写真です。写真の裏に恒太郎の筆跡で、「慶応三年三月に横浜での写真」と記されています。あとの三枚は、三郎助、恒太郎、そして次男英次郎各人の上半身を撮影したのですが、この時撮影された一枚が、最もよく知られている写真と言えるでしょう。三郎助のいでたちは、フロックコートを羽織り、チョッキ・ズボン姿に両手をさした海軍士官の姿、両手を腿の付け根あたりに揃え、口元はきつく真一文字、そして瞳は真っ直ぐに正面をとらえています。

撮影の翌年に、戦いの地、函館に赴いていることを考えると、命を捨てる覚悟がにじみ出ているようにも感じられます。

蓮杖は、その後、中島父子が戦死した旨を知り、新しく焼いた三郎助の写真に、「幕臣中島三郎助明治二年五月十六日函館ニ於テ戦死。兄弟俱ニ死ス。大義ノ為、各忠勇比類ナシト言傳ウ。米国ウインシン傳習下岡蓮杖写」と記し、そ

の忠誠心を称えました。

ちなみに、この時撮影された写真をもとに、画家、高橋由一筆の遺影も残されています。

高橋由一は、本格的に油絵技法を習得した日本で最初の洋画家として知られています。特に代表作「鯉」は、美術の教科書にも登場する作品として、学生時代、目にされたかたも多いでしょう。

現代には薄れつつある「忠義」や「勇敢」といった言葉を思い起こさせる幕臣・中島三郎助の凛としたその姿と眼差し。セピア色の写真は、現代の私たちに何を語りかけているのでしょうか。

## 参考資料

- 中島三郎助文書 中島義生編
- 明治維新人名事典
- 歴史読本 幕末人の肖像

\*当館では、郷土資料のほか、中島三郎助の業績を示す資料も数多く展示しています。どうぞ、ご見学にお立ち寄り下さい。





# 歴史語りい座・浦賀二十

郷土史家 山本 詔一

## ●生魚船の取り締まり●

享保6年（1721）2月、浦賀沖を航行するすべての船は、新設された浦賀の船番所において「船改め」といい、乗組員と積み荷の検査を受けなければいけないことになった。

この時代で江戸湾を行き来する船の数は、大小含めて一日約百艘。ここで問題となったのは、生魚を積んだ船への対応であった。冷凍設備などない時代のことであり、浦賀で船改めの順番を待っている間に鮮度がどんどん落ちていき、場合によっては商品価値がなくなってしまうこと想定できた。そこで江戸へ入ってくる魚を扱っていた、日本橋と現在の築地に近い場所にあった二つの魚問屋組合と協議をした結果、浦賀奉行所が発行した沖直通を許可した木札と魚問屋が許可した目印を立てた船に関して、浦賀沖を直通してもよいことになった。また、江戸からの帰り船も空荷であることを条件に沖直通が許された。しかし、こうした特例が認められると、これに便乗する不届き者が現れるのが世の常である。

天明6年（1786）8月、不法行為を繰り返す生魚船に対して浦賀

奉行所が立ちあがった。9月1日から取り締まりを強化することを江戸の魚問屋と生魚を運び込んでいる相模・伊豆・安房・上総・下総の関係者に通達した。

伊豆下田時代から船改めを行って、奉行所の移転に伴って下田からきた下田問屋と浦賀に奉行所ができた時に新たに東西浦賀の問屋に船改めの業務を委託していた。この問屋が全部で百五軒あり、廻船問屋と呼び、また三つの組合組織になっていたので三方問屋と呼んだ。

取り締まり強化に入った奉行所では、三方問屋の代表者を呼び、9月から廻船問屋の代表者二名を乗せた船を沖へ出張させ、木札の所持、積荷、乗組員の検査を抜き打ちで行うように指示した。この船を「沖番船」といった。

生魚船とはいっても、本当に生きている魚は「活魚」といい、これと貝類を積んだ船は、生魚船とは言わず、「野締め」といって釣り上げたその場で魚を殺してしまう方法があるが、これは生かしておいて、弱って死んでしまった魚より鮮度が保てるという、多くはこの方法がとられていた。この野締めになった魚を運ぶのが生魚船であった。

この天明6年から沖番船による取り締まりが始まったが、沖合いで、どうしても派遣されるメンバーに偏りが生じ、これが次の問題を生むことになる。

沖合いでは奉行所の役人の眼も届かないので、実際には違反行為をしていても、「袖の下」をつかませられて、違反行為を見逃すことがあった。問屋にしても人には言えない金品を受け取るわけであるから、いつも同じメンバーで行動を共にするようになる。しかし、こうした行動は誰とはなしに聞こえてくるもので、ついに奉行所にそんな噂が聞こえてくると、番船にもう一艘番船がでるようになったという。

## ～笑話一題～

私が浦賀の町に来て30年以上たちました。父の退職を機に、この地に転居したのです。育ちが東京、仕事も東京・横浜方面でしたので、浦賀の町といっても知っている事と云えば、ペリー、浦賀ドックくらいなもので、地元の歴史など特に興味もなく、今まで過ごしてきました。最近になり、浦賀の歴史を学べる環境となり、幕末期において浦賀の地に起きた事件のインパクトの強さや、中島三郎助、小栗上野介等の行動、活躍を知ることができました。

自然豊かで、歴史的にも興味がある町である浦賀の町を、これからもよく知り、歩きたいと思っています。

## ◇歴史講座開催のご案内◇

平成22年度歴史講座を、1月19・26、2月2・9・16日（各水曜日）13：30～15：30、全5回開催致します。

講師に横須賀開国史研究会会長の山本詔一さんをお迎えし、加茂元善氏著による郷土資料「浦賀志録」を通して、広く浦賀の歴史を学びます。

「広報よこすかお知らせ版」（11月25日付）等でご案内の通り、締切は1月5日（水）必着です。

往復はがき（1葉1名）、又は返信用はがき持参で窓口までお申し込み下さい。ファックスでもお受け致します。

応募者多数の場合は、抽選とさせていただきます。（定員60名）

お問い合わせ：浦賀コミュニティセンター分館（浦賀文化センター）

〒239-0822 横須賀市浦賀7-2-1

TEL・FAX：046-842-4121

**浦賀コミュニティセンター分館（浦賀文化センター）**  
浦賀駅から浦賀通りを徒歩10分

至大津 京急浦賀駅 至観音崎  
浦賀コミュニティセンター 浦賀警察  
浦賀行政センター 浦賀文化センター 市営プール  
バス停・ドック前 至久里浜

所在地：横須賀市浦賀7-2-1  
電話 FAX：046-842-4121